

# UNSCEAR 2020 年報告に 潜む歪み

——甲状腺被ばくを巡るミスリード

榊原崇仁

さかきばら たかひと  
東京新聞特別報道部

東日本大震災から10年という節目に合わせ、新聞各紙で報じられた話題があった。原子放射線の影響に関する国連科学委員会(UNSCEAR)が東京電力福島第一原発事故の健康影響についてまとめた2020年報告だ。

首相官邸サイトにある「原子力災害専門家グループ」の解説<sup>1</sup>によれば、UNSCEARは1955年の国連総会で設立が決議された組織で、「国連の中でも最も歴史のある委員会のひとつ」「《独立性》と《科学的客観性》から、これまで高く評価されてきました」という。福島県が進める県民健康調査でもUNSCEARは頼りにされ、被ばくと発がんの関連を分析する検討委員会は2019年夏に見解をまとめた際、UNSCEARの13年報告に盛り込まれた被災者の線量推計を活用した。

そのUNSCEARが今年3月9日に公表した20年報告を巡り、読売新聞は10日付朝刊で「被曝線量は高くないと推定し、『将来にわたり被曝を直接原因とするがんなどの健康影響が増加する可能性は低い』と予測した」と報じ、他の全国紙や東京新聞も同様の内容を伝えた。

しかし英文の20年報告を読み込むと、大きな問題が潜むことがわかった。線量推計の仕方は乱暴で、覆い隠せない深刻さはプレスリリースの段階で歪曲されたようだった。そんな20年報告には、筆者の近著『福島が沈黙した日 原発事故と甲状腺被ばく』(集英社新書)で追及した「いわく付き」の組織が深く関与していた。

以下、20年報告の問題点を詳しく見ていく。

## 最高30 mGyとあるが……

20年報告はUNSCEARのサイト<sup>2</sup>で英文版がアップされている。本文にAPPENDIX(付属資料)の「A」「B」などを合わせて計248ページになる。甲状腺被ばくを強く意識しており、「まずは線量を推計」「その上で被ばくと甲状腺がんの関連を分析」と展開している。

線量推計を改めて行うのは、特殊な背景があるからだろう。

甲状腺内部被ばくをもたらすのは放射性ヨウ素だ。体内に入ると甲状腺に集まり、放射線を出して被ばくを生じさせる。線量をつかむためには本来、甲状腺があるのどに測定器を当て、捕捉した放射線の状況から、甲状腺に集積した放射性ヨウ素の量をつかむ必要がある。その後、半減期に伴う減衰や甲状腺の重さなどを考慮した式を組み立て、線量を導く。

ところが福島原発事故では、政府が放射性ヨウ素の甲状腺集積量を調べたのは1080人だけだった。被ばくの全容をつかむには、机上の計算で推計せざるを得なくなっている。

やむなく机上の計算を行う場合、放射性ヨウ素の体内摂取量を見立てた上、国際放射線防護委員会(ICRP)が示す係数を掛けて線量を導くのが一般的だ。この際、放射性ヨウ素の拡散状況を見積もった上、被災した人がどの地域にどれだけの時間いたか、時間あたりの呼吸率がどうか、飲食の状況がどうだったかなどを仮定することになる。